

日本財団

知的障害者 40 人の「人生の岐路における選択」経験についての実態調査

インタビュー「語り」

P. 2 語り1. 『今の生活は自分で決めている。だからいやなことはない』

… 櫻 宏美さん(仮名) 50代 女性

P. 8 語り2. 『自分で決める。僕もやっぱり一人の人間だから』

… 春野 聡さん(仮名) 60代 男性

P.14 語り3. 『これからは人の役に立つことをしたい』

… 林 愛さん(仮名) 50代 女性

P.18 語り4. 『家のような、本当に安心できる場所がみんなにあってほしい』

… 星野 優子さん(仮名) 40代 女性

P.22 語り5. 『『いつかはA事業所を離れることになるけど、自分の夢を叶えたい』

… 山崎 聡さん(仮名) 30代 男性

P.25 語り6. 『わいらだってちゃんと生きてるんやから、いなくなればいいなんていわんでほしい』

… 東山 進さん(仮名) 50代 男性

『今の生活は自分で決めている。だからいやなことはない』

櫻 宏美さん（仮名） 50代 女性

【子どものころ】

両親と私と妹、母方の祖父母の6人で暮らしていました。そのころ一緒に住んでいた母方の祖母が引っ越し好きで、そのせいで住むところがあちこち変わったんです。父も母も働いていて、あまり家にいませんでした。さみしそうにしていると、祖父が自転車の後ろに乗せて近所を走ってくれました。やさしかった祖父は幼稚園の時に亡くなりました。

小学校5年生の時に母が亡くなりました。自殺だと親戚の人から聞きました。お母さんと私が一緒に歩いているとき、私が反対側から来た人にぶつかって、その人の持っていた瀬戸物が壊れてしまったことがあって、お母さんはその人に謝って、私はあとでお母さんにすごく怒られました。「弁償や」っていったけど、お母さんはもしかしたら弁償できなくて、死んでしまったのかもしれない。私のせいで死んでしまったのかもしれないと思っていました。

そのあと、児童相談所に妹と二人で行ってしばらくそこにいて、6年生になったら二人とも児童養護施設に行くことになりました。週末になると父が会いに来てくれたけれど、父が帰るときはさみしくって泣いていました。

中学からは施設を出て父と暮らすようになりました。妹と三人で。

中学2年の途中から養護学級に移りました。それまではずっと普通学級に行ってたんだけど、授業がだんだん難しくなっていくようになって、あとみんなと一緒に給食を食べるのが何だか恥ずかしくなってきた。私、ゆっくり食べるから時間がかかるから、それで授業をさぼったり、給食の時にどっかいたり、学校に行かなかったりしていました。でも、それだけで養護学級に入れられるんだと思ったらとってもショックでした。先生がお父さんに「養護学級に行った方がいい」といって、それで行くことが決まりました。私には何も聞いてくれなかったし、話してもくれませんでした。「明日からはあっちの教室や」といわれただけで。

【施設に入るきっかけ】

高校を出て働いたけど、すぐにやめました。その後、4、5年かな、働かないで家のことをやっていました。外に行くのは時々友だちと出かけるくらい。精神薄弱者更生相談所に相談にいったり作業所を紹介してもらったりもしたけど、続かなかったですね。相談所でやる催し物には時々通っていました。クリスマス会とか、ハイキングとかイベントみたいなのがありました。

なんかしたいなと思って、担当の先生に「ボランティアしたい」といったら、次に行ったときに二つの施設のパンフレットを見せられて、「私、ボランティアしたいって思うっていうのに、何でよその施設2カ所も見せるんかな、全然ちゃうやん」と思ったんです。けど、「どっちにする？」っていわれたら、「選ばなきゃいけない」と思って、その時「砂山にする」と自分で決めました。どうして施設を勧められるのか、分からなかったけど、「まあいいか」と思って決めて。

そしたら施設入所が決まっちゃったんです。24歳の時でした。市役所に行って、更生相談所の担当の先生と一緒に電車乗って見学に行って。なんかおかしいとは思ったけど、でも施設に入ってもいいか

という諦めた気持ちもありました。そのころ父親と喧嘩ばかりしているときだったから、ずっと家にいたくないという気持ちもあったし。見学に行ったら、「まあこんなところかな」という感じで入ることになりました。

【施設に入ってみると】

しんどかった。

みんな軽作業をずっとしているんです。作業棟があって。そこで何年か作業をがんばったら、外の仕事に行く人もいるし、時々みんなで出かけたりすることもあったけど、ほとんどの人はずっと施設の中で過ごしていました。ごはんとか、やることとか、する時間とか、みんな決まっていて、たまに遠足とか出かけることもあったんですけど、その出かける先も決まっていました。

だから、施設を出たいって思うようになったんです。「ここは違うぞ」というのがだんだんわかってきて、何とかしたいと思いました。でも言葉に出して言うことはあまりなかったかな。周りに怒ったりして行動で示していたかな。なんとかがんばって自分から「施設出たい」といったこともあった。でも誰も聞いてくれなかった。

ただね、いつの間にか施設を出ることにはなったんです。急に決まった。どうして出られるようになったのかは分かりません。職員同士で話して決めたんだと思います。出てから行くところも決まって、私はどういうところか知らなかったけれど。ただ、「出られるよ」とだけ、急に言われた。うれしかったけど、仲良かった友だちと急に別れなくちゃならなくなったのはさみしかったですね。もうあの頃施設にいた友達はみんな出たようです。バラバラになっちゃって、もう誰とも会えていないです。

【施設から出て】

決められていた作業所は行ってみたら、厳しかったんです。ついていかれなくて、半年ぐらいで辞めました。一般就労を目指す訓練のところみたいでした。それから家になるようになりました。5、6年ぐらいかな。中学の時の養護学級で1歳下だった友だちと同級生がそれぞれ家まで遊びに来てくれて、時々遊びに行くぐらいしか、外には出ませんでした。

家にいる間はテレビばかり。あとレコードやラジオを聞いたりしてましたね。人見知りして、なんだか人に会うのが恥ずかしいような気持ちでした。施設に入る前は家のことは私がしている感じだったけれど、施設から出てきたら妹が家のことはやっていて、「あまり、邪魔せんところ。邪魔したらあかん」と思って…で、やることなくって。

【A事業所に来るきっかけ】

30過ぎて今住んでいるところに移ってきて、「30過ぎたし、そろそろ仕事せなあかん」と思って、就職活動を一人でやりました。コンビニでバイトの雑誌見て、その中から洗い物とか、掃除、清掃とか見つけて自分で履歴書も書いて連絡しました。10回ぐらい面接もしたんですけど、みんなダメだったんです。つらかったけど、誰にも相談できなかった。

そのころ通ってた診療所¹の先生に、作業所に通ったらといわれたことがあって、職安の福祉課の人

¹ 当時精神科のクリニックに通院していた。

に、どこかいい作業所ありませんか、って聞いたら、A事業所を紹介してくれました。

【今の生活】

(仕事)

今の仕事は、A事業所の厨房で働いています。盛り付けとか、皿や食器を洗ったりする仕事。水仕事もあって手が荒れたりとか、大変だけどやりがいのある仕事です。朝、9時半に入って、午後1時半までの4時間だけど、あつという間に終わります。最近30分伸ばして2時までになりました。A事業所のチーフに、「2時まで頑張ってください」、「もうちょっと稼いでくださいよ」っていわれて、「がんばってみようかな」って思っただけで、そんなふうに声をかけてくれるのはとっても嬉しかったです。頼りにされているんだなって思っただけで、2時までやって、仕事終わった後、「ああ、今日も仕事頑張ったなあ」と思えます。

(住まい)

家はA事業所からすぐ近くのグループホームに二人で住んでいます。もともと私は親と住んでいて、何度かショートステイに泊まったことはあるけど。そのうちに春野くん(仮名)と出会って、式を挙げる前に一緒に別のグループホームに住むことになって、そこから15年、ずっと一緒にグループホームに住んでいます。

最初のグループホームは平屋の一軒家。初めのころは何も気にならなかったけど、だんだん隣近所が気になってきて、、、回覧板がなかなか回ってこなかったことがあったんです。それで、もうちょっと広いところに住みたい、というのもあったし、職員にいったら、じゃあ引っ越ししましょうってことになりました。いろいろ聞いてくれて、布団をベランダに干したいとか、希望をいって。そしたら、今のところを見つけてくれました。ベランダは広いし、お風呂は広いし、部屋も広いから、気に入っています。建物の8階。日当たりもいいんです。

【恋愛・結婚】

(出会い)

春野くんと私は同じ施設の出身なんです。施設では男性と女性で棟が分かれていて、ご飯食べるときは一緒に大きな食堂で食べる。そのころは彼のこと、全然知らなかったですね。でもね、向こうは「見てた」っていうんです。A事業所の活動の中で話すようになって、あっちから「同じ施設だったよね」といつてきた。彼のことは前からかっこいいなあって思っていました。

(最初がプロポーズ)

結婚とか、誰かと一緒に暮らすとか、そういうのは前からいいなあって思っていました。A事業所にはそういう人たちがいたから。桜がきれいで有名な公園にみんなで花見に行ったことがあって、その時にね、二人だけでみんなとは別のところ、池のところにある椅子に座って話をした。私から、「結婚しよか」っていいました。そしたら春野くんも「いいよ」って言って、いきなり手を握ってきて、びっくりした！

その後、お父さんに「いっしょになるねん」って言って、職員にも話して、結婚式の準備とか、お金のこととか、お父さんもA事業所に呼んで、一緒に話をしてくれて。お父さんは「同じA事業所の人や

からかまへん」って、「いいよ」っていうてくれて、うれしかった。

(プロポーズの後にだんだん好きになっていく)

職員の人は応援してくれてました。私の思いを伝えたら、「春野くんのいるグループホームに遊びに行ったら」って勧めてくれて、それから週末は春野くんのグループホームに遊びに行くようになりました。彼の方はあんまり喜んでいるようなそぶりは見せなかったけど、私はずっと遊びに行くっていう気持ちがあったから、週末ごとに通っていました。

(結婚の準備)

結婚式はその年の12月になりました。秋ごろから職員が、カレンダーを見せてくれて、12月の大安を教えてくれて、結婚式を挙げる日を「何日にする？」って聞いてくれて。式場も結婚式も、教会なんだけど、3カ所あって、「どこにする？」って聞いてくれて、自分たちで一番安いところに決めました。で、空いている日を聞いて、12月5日に決めて式を挙げました。

早く結婚したいというのは何度も職員に言ってました。でもなかなか決まらなかったんです。まだかなあって思っていました。結婚式のお金はお父さんが出してくれました。ドレスは職員の友だちが貸してくれました。最初は式場の方でも選んだんだけど、サイズが合うのがなかなかなくて、職員のお友だちのを借りることになりました。春野くんも職員の知り合いが写真屋さんでその人に衣装貸してもらいました。

(結婚式と新婚旅行)

結婚式は緊張しました。ドレスはとっても気に入ったけど、緊張して、、、

新婚旅行は京都に一泊旅行をしました。だからそれから毎年京都に12月に旅行しています。

【最近の出来事】

春野くんがWBCに夢中になって、スポーツ店にTシャツ見に行きたいっていうから、一緒に行ったら、そのTシャツが5千なんぼって。見たらね、本人ほしいって。大谷って英語で書いてあって。なんでTシャツが5000円もすんのって。でも、みたら欲しいって、袋から出してもらって合わせたら買うってなって、それで買って。本人がほしいっていうからしゃあないかって思って。向こうが2600円出して、こっちが2400円かな。

そこでは怒らなかったけど、家帰ってからちょっとキレたね。5千なんぼもするTシャツなんて、私、買ったことないわ。実はお店にWBCのユニフォームもあって、1万したんだけど、それは春野くんのサイズがなかったから買わなかったんです。でもあったら買うつもり？って思ったらイライラした。そんなにしたら一気にお金なくなるわ、って思って。お金ないのに。

後ね、この間サッカーも試合があった時にシャツ買ったんです。春野くん本人はスポーツほんまに好きなのか、分からんけど、テレビ見ててほしくなるんよね。あれは4千なんぼ。

【これから】

春野くんと仲良くやっていくこと。あと、とにかくA事業所で厨房でがんばって働いて、お金稼いで、もうちょっと小遣いが増えたらいいなって思ってます。今は4万か5万もらって、手元には1万5000

円お小遣いとしてもらってます。もうちょっとほしいなとは思う。そしたらいろいろ買いたいし、旅行は12月に毎年京都に一泊行くし。職員さんに手伝ってもらって、色々決めていく感じ。

今の生活は嫌なことはないです。自分たちで決めているから。職員と相談しながら。楽しくやれています。

解説

櫻さんは【子どものころ】に転居や母の死をきっかけとした社会的養護の場の経験など、大人の都合で次々と居住の地が代わる経験をしている。これらに際して自分の意見を聞かれることなく、決められた運命を受け入れるしかなかった。特に養護学級への移動では、納得できるような説明もないまま、自分のことにもかかわらず、自分の意見表明が可能になる瞬間もなく、排除される経験をしている。加えて母の自死では、やはり説明がない中で、子どもが自分なりの解釈で理不尽な出来事に理由を求め、自分を責めてしまうことが示されていた。

こうした「諦めて受け入れる」経験はその後の彼女の意思決定に大きな影響を及ぼしていると考えられる。【施設に入るきっかけ】ではボランティアを希望したにもかかわらず、施設入所を勧められるという、どう考えても納得のいかない提案だと思われ、当然それには反発していいはずだと思うし、事実櫻さんもそれに気づいているにもかかわらず、それを受け入れてしまった。この事実には、彼女がこれまで自分の意見を受け止めてもらえた経験がないこと、他者が彼女の人生の選択権を奪ってきた結果、たとえ理不尽で納得のいかないことも「諦めて受け入れる」ことでしか彼女が生きていけなかったことが示されている。

また一方で、施設入所は、彼女の直接の希望とは異なっていたが、一日中家にいて家族との関係に煮詰まった生活を打破する結果にはなった。すなわち、彼女が「ボランティアをしたい」といった裏にあった「今の環境を変えたい」という希望には皮肉にも対応していたことになる。櫻さんが高校を卒業したころ、1980年代の中ごろであるが、地域に十分な社会資源がなかったこともこの理不尽な提案に影響を及ぼしていたのではないか。

施設に入ってみると、想像以上につらい生活だった。そのことが徐々にわかってきて、櫻さんは怒りの感情を行動で表したという。想像でしかないが、おそらくものに当たったりして怒りの感情を表している、言葉での説明が少ない彼女は、きっと当時の職員からはより重い障害、理解できない人物と判断されていたのではないだろうか。現在の櫻さんからは想像もできない。やはり環境が障害をより重くすると言えるのではないだろうか。

その後、施設を出ることができたが、その決定も施設側によるもので、彼女には説明もなかった。施設でできた、数少ない大事な友人との別れも急で心の準備もなかった。地域に出て最初に通った事業所も彼女は意見が反映されたわけでもなく、施設側が決めた次の場所だった。結果として彼女は事業所での仕事を続けることはできなかった。再びの家での生活は、妹が彼女の役割をすでに担っていてやるものがなくなった。施設入所の経験が障害者の居場所を奪うことが示されていた。5年間もの引きこもり期間は次のステップを踏むには必要な期間だったのだろうか？長すぎる空白期間だったのではないだろうか。

しかし、櫻さんは自分でこのままではいけないと、動き出す。この力はすごい。一般の求人を見て自分で就職先を開拓しようとするパワーは、30歳という年齢に対して自分が何もできていないという思

いから来ていた。知的障害のある櫻さんも、当たり前といえば当たり前だが、世間一般の価値観に大きく影響を受け、それに適応しようと頑張っていたことが示されている。同時にその価値観にそって生きることへのストレスが大きかったのではないか。当時、彼女は精神科のクリニックに通っていた。

しかしその医師の勧め、実家の転居、ハローワークの紹介という偶然が重なってA事業所と出会うことになる。その後彼女の人生は大きく変わった。

好きな人を見つけ、結婚しようと自分から言い、相手のところにも出かけて行き、積極的になっていった。職員は結婚式の準備など、彼女の思いを形にしていく支援をした。グループホームについても、希望を聞き、それを実現できるように支援をしている。

一方で、仕事の場面では、櫻さんは職員から労働時間の延長を勧められており、「頑張ってください」「稼いでくださいよ」という言葉には本人の意思を問うというよりも、職員の考えや思いがストレートに伝えられている。だが、それに本人が喜んで応じている。このようなやりとりは他の人の場面でもあり、A事業所の職員と利用者のコミュニケーションとしては特別なことではない。この点については全体の解説で考察したいと思う。

櫻さんと春野さんは時にけんかをしつつも、二人での楽しい時間を過ごしている。今後も互いを必要な存在として認めながら生きていこうという気持ちが伝わってくる。そして彼らを職員がサポートしながらこれからも二人の人生が続いていくのだろう。夫婦のやり取りについては、次の春野さんでより詳しく解説したい。

『自分で決める。僕もやっぱり一人の人間だから』

春野 聡さん（仮名） 60代 男性

【子どものころは内弁慶だった】

内弁慶だったんです。ほんとに。だから今みたいな感じじゃなかったですね。仲間はいたけど、2、3人ぐらい。まあ、目立たないというか。しゃべらなかつたですね。中学まで普通校で、中卒です。

【仕事は続かず、病院や施設へ】

それから仕事したんだけど、長続きしなくて。いろんな仕事したけど、みんなすぐ辞めてしまって家に引きこもる時期が長くて。なんで続かなかつたのかって？そうですね。仕事についていかれなくて。しんどかつたです。どうもできなくて。誰もわかるように教えてくれないから、ただ、「やっつけ」っていわれても何やっていいか、わからないし。で、できてないとバカにされるし。

だからもう仕事にはいけなくなつたんです。いやになつてしまって。家でずっといる時期があつて。精神病院に入院したこともあります。一回ね。暴れちゃつて。親が電話してね。救急車で精神病院の方に送られて。あそこもたいへんでした。ベッドに手足をひもで縛られてね。動かんように。そういうところでした。1年間入つたんだけど、1年経つて先生が診断して「もう退院していいですよ」つていた時は、うれしくて。お父さんが迎えに来てくれて一緒に帰つたんだけど。「しんどかつた」つて話したら親も聞いてくれたけどね。

でもしばらくして、やっぱり親とうまくいかないんです。家にずっといるから。それで兄貴がいるんだけど、兄貴が電話帳で施設を調べて、電話してそのまま入れられて。そこからずっと入所施設にいたんです。

昔は亡くなつた親父もきつくて頑固で。お兄さんもきつかつたですね。だから二人と喧嘩することもあつて。結構。その点では施設行って良かった面もある。やっぱりしんどかつたから。家にいて退屈だったし、ひきこもりつていう感じで。家から出られないのも嫌だし、出るのも嫌だし。お母さんが生きているころは、一緒に買い物にもよく行つたし病院にも一緒に行つたりしてたけど。施設に入ると、帰省は年に正月とお盆ぐらいでほとんどなかつたんです。家に帰つてから施設に戻るときは、寂しいなど思うこともあつたけど、しかたないなと思つて。我慢してました。

【施設での経験】

33歳の時に施設に入所しました。入所施設は髪とか染められなくて、食事制限もされてて、部屋も2人部屋とかだつたし、寝る時間とか、入浴時間とかも決まつてて、消灯も決まつてて、あと洗濯機を使える時と使えない時があつて、なんかいろいろ厳しくて。

一度、僕は担当の先生に、朝の買い物の時にちょっとCD買いたいつていって、それで買ったんです。そしたら別の職員からどつかれて、倒されて、職場で。「なんでこんなもん、買ったんだ」といって首を絞められて。それがものすごくしんどかつた。いやだつた。

きっとその職員は買うのはシングルだと思つたんだと思います。でも僕がアルバム買って来たから。曲がたくさん入っているやつ。それでその職員はカツとなつて僕にあたつてきて。首絞められて、倒さ

れて、ほんとにしんどかったですよ。一応、一緒に買い物に行った職員は、「今日は特別な日やから、CDは買っていいですよ」っていったんです。でもね、ダメっていう人もいて。そんなことが施設ではいろいろあったし。つらかった。

利用者にもいろんな人がいて、きつい、カッとなる人もいて。大変でした。

施設では最初音楽も聴けなかったんです。テレビもなくて。ただもう布団があるだけ。だから布団に潜り込んで寝てた。それでようやく僕が公衆電話のところに行って、テレホンカード買ってもらって、家に電話してテレビとラジカセ欲しいって言って、買ってもらって持ってきてもらって。ブラウン管の小さいやつ。それでずっとテレビを見てましたね。一回、ビデオで録画したい番組があって、施設の人にいったんですよ。そしたら怒られてしまって。ただ録画してもらいたかったただけだったんだけど。嫌だったんだなと思って。そういうのはしんどかった。

(施設での恋愛)

施設でも彼女とかはいました。バレンタインデーはたくさんチョコレートもらったし。ロッカーにたくさんチョコレートが入ってて。そう、もてましたね。彼女とはデートはしてました。施設ではもちろん厳しかったし、男子棟と女子棟が分かれてて、ほとんど会う時間はなかったです。でも、普通の日とか、軽作業するときとか、ちょっと話したり。施設も1年に一回は一泊旅行とかもあったし、運動会とかお祭りとか、それでそういう時にちょっと一緒にいたりとか、そういうのはしてましたね。施設の職員も別にダメとかは言わなかったですね。

施設を出て一緒に暮らそうとか、そんなことは思いませんでしたよ。いずれかはもう別れると思ってましたし。僕がA事業所に決まって、そのちょっと前に付き合ってた女の子は別のところに決まって、お別れ会とかしたけどね。その時は僕はケーキ、食べられませんでしたね。しんどくて。

(施設を出るとき)

昼休みだったかな。いきなり担当の松本さんが「ちょっと話がある」って言ってきて。「A事業所っていうところがあるんだけど、一度体験行ってみる？」といわれて、びっくりして。A事業所の所長さんから電話がかかってきて、「一度A事業所に来てみない？」って言ってきて。それまで施設を出るとか、考えたこともなかったけど、でも僕も気が変わって、出てもいいなあとと思って。でも僕はA事業所って、どういうところなのかなって知らなかったから。ずっと10年ぐらい入所施設にいて、分からなかったから。それでグループホームで泊りの体験をしてみるっていうことになって、そしたらA事業所の職員が車運転して迎えに来てくれて、うちの施設からは僕ともう一人、二人で乗っけてもらって。1泊か2泊体験したんだけど、やっぱりよかったなと思って。グループホームがいいなって思ったんです。なんでも好きな時間に、夜でも買い物にも行けるし、コンビニにあったらコンビニとか、夜でもできるし。入所施設だったら夜なんて出られへんかったし。やっぱりそこが違うなど。グループホームの方がやっぱりいいと思った。

そしたらあつという話が進んで、荷物をまとめて玄関のところを持ってきて宅急便で送って、僕はA事業所の人が迎えに来た車に乗って行って。最初は男3人のグループホームに住んで。若い人が二人いて僕を迎えてくれて一緒に生活してました。朝ごはんとか晩ご飯とか作ってくれて、昼はA事業所で食べてましたね。仕事して。

【今の二人の生活—A事業所に来て】

今の生活は楽しい。結婚してちょうど16年かな。それぐらい。A事業所に来て、なんか違うなと思って。前はカッとなるきつい当事者とかもおったけど、A事業所にはいないんです。僕は櫻さんと結婚できて、ほんとにうれしいなと思うし。

(出会い)

そのころ僕はA事業所にいて、櫻さんはA事業所にいて、曜日によって分かれたり一緒にやったりしていて、たぶんその時は櫻さんが職員に僕のことを聞いたんだと思うんだけど。「同じ施設だった人がいるの?」って。そしたら職員が僕のこと見ながら「同じ施設にいた人、来てるよ」っていったから、本人が僕のことを知ったんだな。

クリスマス会があったときに、僕がちょうど端っこの方に座ってたら、櫻さんが声かけてきて。僕ちょうどそのころ金髪にしている、そしたら櫻さん、「職員と間違えたわ」って言って声かけてきて。そんなんでしゃべるようになって。僕は施設出てすぐに金髪にしたんです。

(結婚の準備→職員のサポート・自分の変化)

僕はそのころ、家族がほとんど連絡がつかない、行方不明というか。母親は施設にいる間に亡くなったんです。その後、親父も亡くなって。でも親父が亡くなったのを知ったのは、櫻さんと結婚してからだから、そのころはただ家族とは連絡が取れなかった。だから施設の職員の車に乗せてもらって、櫻さんと櫻さんのお父さんと一緒に結婚式場の見学に行ったりとかしてました。困った時とか、しんどい時とか、今までは言いづらかったんですけど、自分から言えるっていうのが今はできてから。職員の皆さんにも喜んでもらって。困った時とか、職員の人にはえば解決してくれるし。自分から言ったらいいんだと思って。職員、確か佐藤さんからも「自分から言っているんだよ」って言ってもらって。買い物とかも「相談してね」ってしてくれるから、今度新しいタブレット買う予定になってるんです。

(二人の日常)

他の人は出かけるときガイドヘルパー使ったりしているけど、僕らは、櫻さんと僕は、二人でどこでも出かける。夫婦旅行もあって毎年12月に京都に行くんです。ホテルは職員の佐藤さんが探してくれて。僕らはほんとに2人でどこでも行けるし、買い物も二人で行っているし。

食事はコープに頼んでいて、セットになっているのが来るんです。発泡スチロールに入っていて。玄関に置いてあるんです。それを持ってきて冷蔵庫に入れて。その中から、今日はこれにしようとか順番決めて、作って食べてますね。セットになっていて、炒めたり、だいたい炒めるのが多いですね。あと、スープ系とか。

櫻さんも手伝ってくれるし、僕は時々。交代で作っている感じかな。今日は僕がつくるわって言って、で、別の日はもう櫻さんが作ってくれて、そういう日もあるし。二人で協力し合って作っているかな。

土日の朝なんかは、時々櫻さんに声かけて、僕がモーニング、喫茶店で食べているようなの作って。フライパンにオリーブオイルして、火をつけて、流して、ハム載せて、焼いて、その上に卵落として目玉焼きにして、塩コショウして皿にのせて、レタスは手でちぎってキャベツは包丁で細かく切って、そ

れも載せて、ドレッシングかけて、で、ウインナーを半分に切って、僕と櫻さんのお皿に分けて、果物はバナナを1本半分に切って、それを二つのさらに分けて、最後にパン、四角い、こんな厚いやつを焼いて、半分に切って、マーガリンを薄く塗って、で皿にそのパンも載せて、櫻さんに「できたよ」って声かけて一緒に食べる。

僕は昔から料理したから、家にいるときから。だからお好み焼きも作れるし、それを櫻さんがおいしいおいしいって食べてくれるのがうれしい。モーニングもおいしいって言ってくれるし。料理を作るのは僕は好きですね。

櫻さんとは、まあ、仲は良いですけど、喧嘩もありますね。やっぱり。それはまあ仕方ないけどね。こないだは土曜日、買い物して帰ってきてからちょっと喧嘩になってね。その時に電話がかかってきたんですよ。A事業所から。それで当事者少ないから、ちょっと来てもらいたいって、男性職員から僕に電話がかかってきて、助けにいったんですよ。それで、ひと段落ついて、職員もおるし、もう大丈夫っていわれて帰りに、マクドが近かったから、マクドが桜の季節のバーガーっていうのをやって、そうだと思って、櫻さんと僕の分と買って、僕がお金出して買って、持って帰って、ホームについて玄関あけて、カギ閉めて、リビングに行って。櫻さんは布団に寝転んで、僕が「ただいま」って言っても何も言ってくれなかったんだけど。「ハンバーガー買ってきたよ」って言って声かけて。そしたら本人びっくりして、リビングに来て、テーブルで一緒に食べて、ハンバーガー。前はポテトなんかは残すこともあったけど、この時はセットのポテトも全部食べて、「おいしかったのかな」って思ってた。僕も、帰りになんか買って帰った方がいいんじゃないかなって思ってたから。マクドのはテレビでCMしてたから、これセットで買ってこうって思ってた。そしたら本人、喜んで食べてました。

性的なことについて？そうですね、結婚するときに職員から教えてもらいました。でもまあもっと前から施設に入る前から知っていたこともあるんですけど。僕らは結婚が遅かったから、子どものことは考えませんでした。ただ、櫻さんと二人の生活ができればいいと思ってましたから。

【仕事】

最初、僕が来た時はまだA事業所の中に厨房がなくて、しばらくして厨房ができて、最初は盛り付けとか。テーブル拭いて、消毒して、弁当並べて盛り付けしてたんですけどね。今は小鉢にしたり、どんぶりにしたりしているけど、前は弁当だったんです。それをやってて。

今は朝の仕事。僕は朝が強いんです。だいたい3時か4時には目が覚めて、6時になったらお茶をもって出かけますね。お茶は前の日に櫻さんがやかんで作って冷やしておいてもらったやつを一本もらっていきますね。で、朝の仕事が終わったら、A事業所の自転車置き場にあるベンチに座って休憩取って飲んでますね。こういう仕事のローテーションっていうか、自分で決めてます。何もしなかったら職員から仕事しなあかんって言われるけど、厨房の仕事さえちゃんとしてたら、あとは何も言われなから。仕事さえしたら大丈夫だってみんなわかっている。

A事業所の仕事を任されたときは、あれは確か僕がホールで音楽を聴いてたんですよ。そしたらA事業所のチーフが、佐々木さんっていうんだけど、僕のところに来て「春野さん、早出出勤やってみない？」っていうんですよ。それで僕は「やります、やってみたいです」っていうんですよ。早出っていうのは職員もきつっていうし、リーダーの人、松本さんっていうんだけど、そのひともきつっていうんです。だから誰でもやれるわけじゃないんです。でも僕が朝強いのがわかってたみたいで、声か

けてきてくれたんです。厨房ができるってのもわかってたんじゃないかな。それで僕もやってみたいと思って。僕に声をかけてきてくれて、うれしかったし、厨房の洗い物はもうぼくしかできないって思っているから。他にもできる人がいるかもしれないけど、今はもう僕一人ですから。やっているのが、9時から入ってくる人よりは手当が多い。1時間300円つけてくれているから。誇りってというか、自信もって仕事してますね。今は。やってよかったです、早出は。A事業所来てから、仕事頑張っている、A事業所の厨房はがんばって仕事していますね。

早出で1時間早く来てるから、帰りは他の人より1時間早く上がれるんです。2時30分。それ、みんなうらやましがりますね。櫻さんは2時には終わってて、先に帰っているんだけど、たまにあの人はA事業所のベンチに座って待っててくれる時があるから、そういう時は僕が終わる2時半と一緒に帰りますね。日によって違うけど。

【好きなことができる地域での生活】

施設では録画もできなかったけど、テレビもブラウン管の小さいやつだったけど、今はブルーレイで、今はもう幸せで。テレビもAQUOSなんです。この部屋にあるのと同じぐらいの。ここのはシャープだけど。僕のはAQUOS。お父さんが家で使ってたやつなだけで、お父さん亡くなって、お兄ちゃんに欲しいんだけどっていったら、持ってきてくれて。グループホームに運んでくれたんですよ。それで今使っているんだけど。それで佐藤さんにブルーレイがほしいっていったら、テレビにつけてみるやつ、録画できる、ソニーのを通販で選んでくれて。NHKの紅白とか、見たいものを録画してますね。いっぱい持ってます。今は幸せですね。

【「自分で決めるー僕もやっぱり一人の人間だから」】

施設出て金髪にしたのも自分で決めて。かっこいいなって思って。今はね、ちょっと短くして、ソフトモヒカンってことです。頭の上の方は髪があって、横とか後ろがちょっと短い。大抵は、美容師さんにスマホで見せて、「これにしてください」っていうんだけど、今回はスマホ見せなかった。口で言ったんです。「ソフトモヒカンで、両サイド、横と後ろを短く刈りあげてほしい」って言って。「上の部分をもちょっと残すぐらいにしてほしいんです。出川哲郎みたいな感じ」っていったら、美容師さんが「ああ、わかりました」って言ってきて、バリカンとはさみで切ってくれましたね。

そういうのは自分で考えてます。櫻さんも、「春野くんは短い方が似合ってる」って言ってきて。うれしいですね。

これからやってみたいことっていったら、やっぱり仕事かな。がんばって厨房の仕事をして、早出の仕事をしていきたいなと思って。もっと仕事して、手当をちょっと多くもらって、給料もね。今までは給料も預けてたんですよ。それがね、だいぶ前にはなるけど、チーフの佐藤さんから、「給料はもう、春野さん、全部小遣いにしていよいよ」って言ってもらって。めっちゃうれしかった。前までは預けていたんですけど、それをね、給料もらったら、それ全部小遣いにしていよいよっていわれて、うれしかった。最高です。今週の金曜日が給料日なんだけど、先月は結構がんばったから結構もらえるかもしれない。

もちろん、全部は使いませんよ。自分でもちゃんと貯めるけど。でも、買いたいもんは買います。この間はこれ、エンジェルスの大谷翔平のTシャツ買ったんです。櫻さんが許してくれて。大きな買い物

はすぐには買えないけど、お金がたまってから買えるんですね。職員と相談してそのへんは決めてます。決まっているのは12月の夫婦旅行。京都に行く。後は、A事業所のいろんな行事とかあるから。ピープルファースト大会とか参加したり。僕はあんまり会議には入っていないけど、櫻さんが会長だから、毎回会議出てて、大会は一緒に行きますね。

やっぱり自分で決めるというのがある方がいいと思うんですね。櫻さんも僕もたまにはいろいろあるけど、二人で協力し合って何とかいけてるみたいだから、この調子で行けばいいなと思って。二人で。

解説

春野さんは、普通中学を卒業するとそのまま就職したが、なかなか仕事が続かなかった。春野さんの言葉によれば、職場はわかりやすく仕事を教えるというような環境ではなかった。家にひきこもる中で暴れたりして、精神病院に入院させられた経験を持つ。33歳で施設入所となるが、中学卒業からの18年間は知的障害者としての支援もなく、家族も本人も追い詰められた状況だったのではないだろうか。

施設入所は家族との距離を置くには必要な選択でもあった。しかし、施設の中での生活は家での生活以上に「しんどい」ものだった。春野さんは当時から音楽やファッション、テレビ鑑賞といった娯楽を楽しむタイプの人だったが、施設ではかなり制限があった。恋愛についても同様で、施設の生活は作業を行うための生活であり、それが彼らの人生でもあった。

春野さんの施設での生活は8年続き、41歳の時に退所となった。この退所は施設の地域移行の一環で行われたものと思われる。本人が希望していたというよりは施設側の都合によるものではあったが、体験で「自由」な生活を経験し、本人も希望したことですぐに退所となった。

その後春野さんは人間らしい生活、自分のしたいようにする、ごく当たり前の生活が送れるようになった。髪型や色を自分で決める。好きな服を買い、好きな人と出かける。人生のパートナーも得た。施設に入所しているうちに家族とは疎遠になったが、今は兄とも連絡でき、いい関係だ。そしてこの生活を支えているのが職員である。趣味や娯楽を含めて「なんでも相談」でき、それを尊重してくれる。仕事では、やりがいのある仕事を任せてくれる。

彼も櫻さん同様に声をかけられて、今の仕事をしている。選択肢があってそこから選んだのではないが、今の仕事に満足しているし、今後はもっと仕事を頑張りたいといっている。

春野さんが語ってくれたパートナーとの生活の様子は、モーニングをつくったり、二人で出かけたり、けんかした時には仲直りのきっかけをつくったり、実にほほえましいものだ。夫婦の支援をどんなふうにやったらいいのかわからないという支援者がいるが、相談に乗る、金銭管理など生活が回るように支援してだけで、何も特別なことは必要ないことが春野さんの語りからはわかる。性に関しては確かに結婚することで説明しているが、そもそも本来は結婚する、しないに関わらず、性について知ることが人間として必要である。さらに春野さんは性について施設入所前から「知っていた」と証言している。30代まで地域にいれば、偏ったものかもしれないが、性の情報は入ってきている。むしろ、十分に正確な性の情報はもっと前に提供されるべきだろう。

『これからは人の役に立つことをしたい』

林 愛さん（仮名）50代 女性

【現在の生活】

グループホームに坂本さんっていう女性と二人で住んでいます。前は吉田さんっていう方もいたんだけど、亡くなったので。空き部屋にはこれから誰か入ってくると思うけど、今は二人。のんびりしたペースで暮らしています。食べ物の好き嫌いはないので、グループホームの食事は何が出てもおいしくいただけます。今の暮らしが自分のペースにあっていて、とても満足しています。友達がいて、職員の人が食事を作ってくれて、今はほんとにいいです。

【実家にいたとき】

グループホームに越してきたのは5年前です。その前はずっとうちにいて、その時は憂鬱な気分で、ひきこもりっていうのか、ずっと閉じこもっていて、10年ぐらいひきこもりしていたんです。お父さんとお母さんが亡くなって、自分一人になってから家で閉じこもっていて。でもまあひきこもりといっても、ご飯は自分で買い物に行って作ってたので。ただ誰ともしゃべらなかつたんです。しゃべる人がいなかった。

お兄ちゃんとお義姉さんは一緒に家に住んでたけど、あんまり相手してくれなかつたんです。部屋が分かれて、お兄ちゃんたちは2階で私は1階。キッチンは1階にあるけど、別々に食べてました。一度用があって、2階に向かって下から声かけたら、すごく怒鳴られて怒られたことがあって。それからもう1階から声かけるのはやめました。だからお母さんが死んでからは家の中でひとりぼっちでした。お兄ちゃんには男の子が二人いるんです。お母さんが教えてくれました。私は話したことないけど。

【子ども時代】

小学校と中学校は普通校でした。近所の子からバカにされて、学校行く時もバカにされてました。手で、しっしってやられて一緒に行ってくれなかつた。だから一人でいってました。

勉強は難しかった。ついていけなかつた。お友だちもあんまりできなくて。ほとんど教室に一人って感じてました。先生は声かけてくれるどころか、いじめる側の方についてしまつて。誰も私の見方をしてくれませんでした。思い出したら幼稚園からずっといじめられていた。だから、外へ出て遊ぶってことがなかつたですね。

そうそう、お母さんに「中学校は変わらないか」っていわれたことがある。親戚の人がいじめられてるんやったら学校変わったらって言ってくれて。でも最後まで同じ中学校に行つた。病気があって、脳の病気があって学校休み休みいってたから、だから友だちもできなかつた。

でも、中学の時は、一人仲良しになった子がいたな。アイドルが好きで、その子が好きなアイドルを私も好きになって一緒にワイワイ話して。お友だちになったときは、彼女の方から話しかけてきてくれたの。その子がいたから中学は最後まで行つたかな。

【高校時代】

高校は服飾の専門のところに行きました。ミシンで縫ったり、はさみで切ったり…でも私、手先が不器用なので、はさみとか使ったりするのはちょっと怖かった。その学校に行ったのは、お母さんの勧めです。私はそういう学校は行きたくなかったんです。できればついていけなくても勉強がしたかった。お母さんが裁縫とかするのが得意だったから、その学校に行くことになって。でも私にはあってなかった。できなくても、ちょっと下ぐらいの高校に行きたかった。

体育とか、苦手。走るの遅いし。でも字を書くことは好きだから、国語は好きでした。お母さんの田舎の、お母さんの親に習字を教えてもらって、好きになりました。だからそれを高校ではやりたかった。でもお母さんに洋服の学校に行きなさいっていわれて、仕方ないなと思って。

洋服の学校でもいじめられた。ボディとか、服着せるの、あるでしょう。それを階段から持って降りるとき、みんな私に持って降りさせようとしたから、私、落ちそうになったんですよ。これは先生もその子たちを怒ってくれて。よかったです。

体調もあまりよくなって、休み休みいってました。まあでも作品が出来上がると嬉しい感じでしたね。ウェディングドレスとかお色直しのドレスとか、ワンピースとか、そうそうジャケットを作ったこともありましたね。お母さんが手伝ってくれた。というか、ほとんどお母さんがやっていたような感じ。

【高校卒業後】

高校を卒業してからはずっと家にいました。お母さんが「家にいとき」って言って。みんな普通校の高校に行っているから、私も行きたかった。外に出たかった。

うちで、家のことをやってました。怒られながら。つらくなっちゃって、布を着るはさみで手の親指の付け根のあたりをぶすっと刺したんです。はさみで突き刺して。こっち（手の甲）はボールペンで突き刺したんです。お母さんにはいわなかったですよ。

一時期もっと恐ろしいことを考えていた時期があって、彫刻刀をもって2階に上がって（上にいる人を）刺そうと思ったこともあります。その時は体が震えました。

傷つけると気持ちが落ち着くんです。体を傷つけたら落ち着くっていう感じで。手の傷は、しばらくお母さんに気づかれなかったんで、自分で包帯撒いたりしていたんだけど、じゅくじゅくして、外すのが痛くて。ようやくお母さんが気づいて病院に連れていってくれたんだけど、その時には手がなくなるところだったんです。腐ってて。どうしてそんなことをしたのかって…お母さんにもっとかまってほしかったんです。みんなと高校にも行きたかった。

【母の死】

お母さんと私は仲が良かったんです。お母さんが死んでからは、お父さんは施設に入って、一人で面白くなかったから、家に引きこもって、本読んだり、テレビ見たり、だいたい寝てましたかね。つまらないから。そうそうつまらないから、自分の手で自分の首を絞めたこともあるかな。生きていてもつまらないから。その時は泣き叫びながら。今ではほんとに想像できないですよ。私も。こんなに落ち着いて。

【A 事業所との出会い】

A事業所に繋がったのは、お兄ちゃんとお嫁さんと一緒に役所に行って紹介してもらいました。お兄ちゃんは最初何も相談なしに一緒に役所に行くといわれて。役所に行ってみたら、どこか私が行かれるところないかといったんです。それでA事業所を紹介してもらいました。A事業所を見学したんですけど、場によって車いすの人が多かったり、身体障害者の人が多かったです。自分に合ったところを選んで決めました。

【今の生活】

今は黒いハンガーを白いプラスチックで止める作業をしています。ちょっと力があるけど、大丈夫。仕事も頑張っているけど、仲間にコーヒー飲もうかって行って、持って行ってあげたりして話したりするかな。そういうのが好きです。

家には正月に帰るぐらい。お正月だから帰るけど、一回泊まるだけ。あくる日にはグループホームに帰ってきます。お兄ちゃんにはお正月も会わない。部屋が別々だから。会うのは、面会の時にくるときぐらいかな。

ハンガーの仕事をして、終わったらグループホームに帰って、ごはん食べるときは一緒だけど、あとは自分の部屋でテレビ見たりしてのんびりしている。週末はガイドヘルパーさんと出かけたりします。カラオケとか好きですね。水族館とか。行く場所は自分で決めます。ガイドヘルパーさんが、来週はどこ行きますか？って聞いてくれて、歌、歌いたいなどか言うとかカラオケになります。ここどうですかって言うってくれる時もあるって、それに行こうってこともあります。松田聖子とか、山口百恵とか好きですね。そういうの歌います。

【これから】

好きな人は松本さん。車いすに乗っている人。やさしいところ、怒らないところが好きかな。松本さんと出かけたりもします。カラオケとか、水族館とか。ガイドヘルパーさんと一緒に。今は別々のグループホームに住んでいます。一緒に住む？その話はないですよ。あっちは一緒に住みたいって言うけど。結婚したいって言うけど、私はちょっといやかなって。今のグループホームに住めなくなっちゃうから。一緒にねえ。試してみるのもいいんだけど、ちょっと恥ずかしいかな。松本さんは車いすに乗っているし、世話が大変だから、私は難しいかな。出かけたときにはヘルパーさんがいろいろやってくれるけど、まだ一緒に住んでっていうのはどうかな。わからないなあ。結婚はしたくないけど、やさしくて好き。

松本さんとのお付き合いは5年ぐらい。松本さんから声をかけてきてくれて。だんだん話すようになって、好きですっていわれて、ちょっと恥ずかしかったかな。職員の人に相談しました。そしたら、知っていたみたい。松本さんが私にいうっていうのを。恥ずかしかったけど、お付き合いしたいなって思って、どっか遊びに行ったり、出かけたりしましょう、っていいました。

結婚はしないで、それぞれのおうちに住んで、週末にお出かけする、今の感じがいいんです。松本さんのお母さんは高齢者の施設にいます。時々会いに行っているみたい。私は、いいかな。会いに行かなくて。

今はA事業所でキャスターの仕事もしているんです。吉野さんに「やってみよう」っていわれて、やりたいなって思って、自分で決めました。難しいけど、楽しいです。

将来やりたいことは、人助けとか、電車で目の見えない人がいたら席を譲ってあげたり、やさしくすること、耳の聞こえない人には優しく話しかけてあげたり。手話も習いたいなって思ったけど、ちょっと難しかった。そういうことをやっていきたいと思います。

解説

林さんは子どものころからいじめを受けていて、友人がほとんどなく一人であることが多かった。一方で、あるいはそのためなのかもしれないが、母親との関係は非常に密着したものだ。高校の選択は本来進学する本人が決めるものだが、母親が決め、しかも自分が得意なことを選択した。林さんの意思は全く反映されていない。そもそも林さんに意見を聞いたようでもない。母親はそれまでの娘の人間関係を見て、彼女の将来を何とかしなければと必死だったのだろう。しかし、林さんの得意・不得意、本人の意思を確認するという、重要なことがおろそかになってしまった。

母親が期待して選んだ高校でも林さんはいじめにあった。おそらく母親は林さんの将来をどうしたらいいかわからず、いじめにあわない、煩わしい人間関係から離れた安全な場である家に置くことしか考えられなかったのかもしれない。しかし、それもまた林さんにとってはつらい経験だった。母親と仲がよかったと林さんは言っていたが、どのような関係だったのかははっきりしない。母親と四六時中一緒にいたが、自傷行為をした後の彼女の「お母さんにもっとかまってほしかった」という言葉からは、必ずしも母親からの注目があつたわけではないことが示されている。

また家は林さんにとっては必ずしも安全な場ではなかった。やることもなく、林さんは、自らを傷つけることでしか、自分の気持ちを処理できなくなっていた。そのような時にいる場所が家しかないというのは、より事態を深刻化させたのではないだろうか。また、林さんが母親にべったりだったことも影響していたのではないかと思うが、林さんと兄との関係はかなり悪い。家にしかいる場所がなく、鬱積した感情が自分だけでなく、兄にも向きそうになっていたことを彼女は証言しており、かなり追い詰められた状態にあったことがわかる。

やがて母親が亡くなり、父は施設に入所することになり、兄との生活になった。いよいよ林さんは孤立したが、兄が福祉事務所に相談したことでA事業所とつながり、状況が一変した。通所の場所を決めるところから、彼女は自分なりに比較して自分に合ったところを探し、自分で決めている。好きな人もでき、その人との交際の仕方についても自分の意見を持ち、きちんと主張している。

今後について、人の役に立ちたいという。彼女の世話好きなどが表現されている。本来は自分で自分のことを決める力を持っており、人との関係も築くことができる人なのではないかと思うと、なぜもっと早く親の手を離れて人の輪の中に入れなかったのだろうかと思わざるを得ない。ようやく彼女が、本来の姿のままにいられる場を得て、現在の生活が送れるようになったことが偶然や奇跡であってはならないのではないか。障害のある人を子どものころから家族が抱え込むのではなく、社会資源とつながって育てていける仕組みをつくる必要がある。

『家のような、本当に安心できる場所がみんなにあってほしい』

星野 優子さん（仮名）40代 女性

【子どものころ】

小学校と中学校は、普通級と支援級を行ったり来たりしていて、友達ができなかったんです。どっちのクラスに行ってもお友達がなくて。あの頃は先生も助けてくれたりとか、なかったし。

私は小学校のころから、自分がなんか違う、知的の、あるのかなって思っていたんです。書くのも、歩くのも遅くて。キャンプ行ったりなんかして、同級生の女の子に「遅い！」って言われたりとかしてましたから。中学に入る時に検査をしてそれがわかったので、「ああ、そうだったんだ」と。検査に行ったのは、以前から手紙が役所から来ていたんだそうです。親はそれを知っていたけれど、毎年毎年、そのままにっていて、中学になって、もうそれ以上は変わらないからということで、検査をしに行っただけです。それで療育手帳もとりました。今まで何となくもやもやしていたのが、はっきり分かったという感じでした。

高校から養護学校に行くようになってやっとお友達ができました。その子が A 事業所に誘ってくれたんです。お母さん同士も話をしたりしていて、うちのお母さんの悩みを聞いてくれたりとかして。ここまでわからないで来たんで、どうしたらいいのかって相談してました。

高校を選ぶときは二つ学校があって、見学にいった決めました。自分が選んだ学校の方が遠かったけど、その学校の方がいいなって思って、行きたいって。電車とかバスとか乗り継いでいかないといけなかったから、何度も練習しました。でもその高校を選んでよかったです。そこに行かなかったら、お友達にも会えなかったし、今の自分もないと思うので。

【職場選び】

学校の先生と相談して、話していたときに、「やっぱりあなたは S だよな」と言われたんです。二つの選択肢があって、もう一つあったんですけど、「S、どうですか？」って先生に言われて、私も小さいときにその工場の花見に行っていたことがあったから、いいなあって、入りたいなって思ったんです。実際研修はとても親切でよかったですし。

【以前の職場での経験】

一般雇用の障害者枠だったんです。職場では誰も助けてくれなくて、困っていても、ふつうに見えるから大丈夫だと思われていたので、私も話すに話せなくて。家族にも言えませんでした。

研修の時にみんな優しくかったので、最初のころはみんな優しいんだと思っていましたけど、だんだんこれは違うなと思って。入ったら、女性同士、あるじゃないですか。いろいろあって、うわさもすごかったですし。「仕事に行きたくない」とお母さんにいったこともあります。でも休めませんでした。休んだら何を言われるかわからないので。旅行行ったりしたら、「お土産買って来た？」といわれたりするし。辞めようと思ったこともあったんですけど、後輩がいるからやめられなかった。後先が見えてなかった。

電車で 1 時間かかって、1 日働いて家に帰ると夜の 7 時で、休憩もありませんでした。1 週間働き詰めで土曜日と祝日も勤務で、日曜日しか休みがなくて。でも気を張っていたので、毎日仕事に行っていました。自分の不調も見えなかった。忙しすぎて。日曜日は出かける元気もなくて家でずっと寝ていました。

仕事を辞めたのは、耳が聞こえなくなっちゃって。たぶんストレスだと思います。両親に仕事を辞めるって言った時、特に反対はありませんでした。今はだんだん、こういう時に自分がしんどいんだとか、こういう時は大丈夫だとか、体調を見ることができるようになってきました。

【A 事業所との出会い】

高校時代のお友達に紹介していただいて、最初見学に来ました。ショートステイを利用したくて来たんだけど、ショートステイがなかなか利用できるようにならなくて。相談員の人ともずいぶんやり取りをして、1泊だけでも泊まらせてほしいって頼んで、ようやく去年から少しずつ使えるようになってきました。今年になって「もう一泊どうですか」ってお話をいただいて、自分にご褒美だと思って、「お願いします」って言いました。

それから友達ができるのにも時間がかかりました。仲良くコミュニケーションとるのが苦手で。今までずっと友達がいなかったから、一人だったの。友達がいるみたいに思われるんですけど、いなくて。でも優しい気持ちだけは忘れたくなくて、何があっても、それは。仲間の一人が「こうやって友達作ったらいいんだよ」とか教えてくれて、少しずつ友達もできるようになってきました。

【今の職場】

清掃の仕事をしています。できるだけここに来たいと思っています。父は「今はもう休んだらいいよ」って、体調悪いのを知っているの。お母さんも「前みたいにそんなにずっといかななくてもいいんだよ」っていうけど、私はA事業所好きだから、みんなといたいし、休んだらみんなのことが気になるし。年齢高いですけど、みんなが「お姉ちゃんや」って言うので、私もA事業所は家族だし、A事業所の中でお母さん、お父さんもいますし、その中で私がお姉さんで。家族だって思わなかったら、話もできないですし、みんなといろいろ話していく中でやっぱり力がついていきますし。お姉さんでいいかなって。下の子がまだたくさんいるので。

私、結構動きっぱなしで、みんなが心配するんですよ。休んでって言われるんだけど、まだ退院から間もないからって言われるんだけど、つい動いちゃうんです。

【病気のこと】

婦人科系の病気になっていることがわかって、薬を飲んできたんですけど、それでは済まなくて手術しないといけないかもしれないっていうことになって、どうするか、女の先生なんですけど、相談して。ずっと調子が悪くて、検査だ、なんだって病院にも何度も行くのもどうだろうと思っていて、思い切って手術することにしました。A事業所にみんながいるし、私もA事業所に帰りたいて思っていたので、お母さんに「入院して手術をしたい」といいました。あと、「一緒に泊まってほしい」というのも言いました。先生に3回くらい聞かれました。「入院したら、いっばいのところで寝るのか、お母さんと二人で寝るのか、どうする？」って言われて、お母さんに甘えるのもどうかと思ったんですけど、「いっしょにいてもらえない？お願いしていい？」って言いました。お母さんも大部屋で大丈夫かなって心配してくれてたんで。一人じゃ私、眠れないだろうと思って。

手術して、もう病院に行かなくてもいいといわれて今は安心しています。その間も、スタッフさんが私の調子が悪い時に話を聞いてくれて、ケアをしてくれたので、助かりました。でもまだホルモンのバランスとか崩れるので、調子が戻ってくるまでには時間がかかると思います。最近も本当はまだあまり調子がよくないんです。でもA事業所のみんなが見守ってくれたり、そばに来てくれたりするので。私が元気になるのをすごく待っていてくれて、「今日ご飯どれくらい食べてるのかな」って私のところに見に来てくれる人もいたりするんです。

ほんとに元気が戻ったときに、みんなに「ただいま」って伝えたいと思っています。今すぐじゃなくて。体調が戻って元気になったら、「もう大丈夫だよ」って伝えられたらと思っています。

【A 事業所の映像への出演】

A 事業所で映像制作をしていて、出演することになった時、お母さんとお父さんに話したんですけど、私がそんなに障害が重くないから、出ない方がいいんじゃないかって、他にも出る人いるのになぜ私なのかって言われて。でも「私が出たいんや」って言って。「出てもいいかな？」って話をして。これまではお母さんに自分の意見って言わない方がいいかなって思ってきたので、行ってこなかったんですけど、最近は自分のことを、したいことを話すようになってきました。私もまだ言葉が少なく、うまく伝えられない時もあるんですけど。

【今後について】

ショートステイがようやく使えるようになってきて、、グループホームはまだ、やんわりかなと思っています。私にしても、両親にしてもまだ不安なんです。グループホームってどういうところなんだろうかって。まだぼんやりと先にあるというか。

恋愛についても、、私の体調が悪いので、今すぐってことはないんですけど、彼もあんまり調子がよくないので、お互いの体調を見ながら一緒に出かけたいねって話しています。これまで恋愛もずっとしたことがなかったんです。小学校のころから、好きな人に手紙出したり、バレンタインデーにチョコあげたりしたけれど、返事が返ってくるのがなかった。職場でも好きになった人がいたけれど、その人が会社、辞めちゃったりして。会社の時は恋愛しちゃいけないと思ってたんです。でもここではそんなことなく、恋愛、どんどんしてって。

坂本さんは自分からどんどん話しかけてきてくれるんです。優しいし、話を聞いてくれて励ましてくれるんです。私はそういうのがうれしいなって、すごく思います。職員の人にも相談していて、彼と遊びに行きたいねって二人で話もして、今度お母さんにいつ会うっていうのを紙に書いて渡すという話をしていて。

お母さんは坂本さんとの面識はそんなにないので、、でもいつかあってほしいなと思うんです。私は毎日会っているんで、二人のことがわかるし、それぞれに相手のことを話すんですけど。両親からは特に坂本さんのことは聞かれないですね。私は聞いてくれたら答えるのって思うんですけど。私からお母さんには結構話しているんです。この間は「一緒に来てあってもらえない？」って言いました。

最初は猛反対されてました。私の説明が足りてなかったんだと思うんですけど。最近は話を聞いてくれるようになったので、わかってきているのかどうかはわかりませんが、大丈夫なのかなと。

彼はもう今、グループホームに入っています。先のことはまだわからないけれど、私も今後家を出てとは思っています。これから、少し仕事とかセーブしながら、自分の体の調子を見ながら、やっていこうかなと思っています。お給料は、、確かに前の仕事では一般就労ですから、結構もらってました。20 万ぐらいかな。今は生活介護なんで、5000 円ぐらいです。差は確かにとても大きいんですけど、前の仕事、辞めてよかったと思います。今は、好きな人がいたり、仲間がいたりして、毎日ここに来るのが楽しいし、ここに来れないとすごく気になって。みんなどうしているんだろうって。こんな場所が、もっと私よりも障害の重い人とか、病気をしている人とか、そういう人にもあってほしいなと思います。施設から出て、地域で暮らしてほしいと思います。

解説

星野さんの【子どものころ】の経験、普通級と支援級の行ったり来たりの中で孤立していったという

経験は、「通級制度」という日本流のインクルーシブ教育のシステムにおける課題を明らかにしてくれている。排除の経験の中で、星野さんは自分の障害に気づいていく。しかし彼女は「障害」という言葉は使わない。そこにはまだ彼女が持っている、持たされている障害に対する負のイメージが影響しているのではないだろうか。彼女の家族、特に身近にいる母親は彼女に障害があることを認めようとしてこなかった。母親の態度が彼女にも影響を及ぼしたのではないか。しかし、ようやく高校生になると、彼女の障害を受け入れるようになっていった。だがそれも行きつ戻りつ、である。A事業所の映像への出演についての反対は、軽度の彼女がわざわざ障害の経験を語らなくてもいいのではないか、障害という点では目立たないようにしてほしいという思いも見え隠れする。

高校の選択も最初の職場の選択も、選択肢は「二つ」である。だが、高校の時には自分で見学に行つて、遠い方であっても自分がいいと思った方を選択し、自分で決めたという納得感があった。のちに親友ができたこともこの高校を選んだことへの満足につながっていた。一方、職場に関しては、確かに自分でもいいと思ったということもあったが、二つの選択肢のうちの一つを先生から勧められて、そちらを選択した。その後のA事業所を選択したときは、友人の紹介で他と比較したわけではなく、つまり選択肢は一つだった。だが、それでも今十分満足しているのは、結局、選択肢の数が大事なのではなく、選択した後の経験がどうあるかによって、その時の選択に対する考えが影響されるのだ。

星野さんは、ストレス性の難聴となって最初の職場を退職した。そこは、人間関係が複雑で、助け合つて仕事を進めていくようなところではなかった。噂話や陰口など、陰湿な雰囲気だったことが星野さんの言葉からは示されている。給与は高いが、労働条件もかなり厳しかった。一方、現在の職場では家族のように互いを思い合つて生活していることがわかる。なるべく休まないようにと考えているのは、「来なければならない」のではなく、本人が「きたくて仕方ない」場所だからである。

現在の婦人科系の病気もおそらくそのころからのものであろう。18歳から退職までの約30年近くを、彼女は体調が相当悪くなっていることにも気づかないくらい、気を張り詰めて仕事をしてきた。いわゆるバーンアウトのような状態で退職し、次の仕事としてA事業所と出会っている。居心地のいい空間で、同僚と、家族のように支え合いながら、支援者のサポートを受けて働く方がずっといいというのが、彼女の意見である。

恋愛についても、40代になるまで一度もパートナーシップを経験してこなかったが、ここで出会いがあり、いい関係を構築し始めている。それは現在の職場が恋愛を許容する環境であり、職員のサポートもあることが影響している。母親や父親はまだ二人の関係に納得していないようだが、A事業所でエンパワーメントされた星野さんは、徐々に自分の意見をきちんと言えるようになってきていて、きっと親の説得も成功するだろう。何より職員のサポートがある。それぞれの存在が尊重される場、それを星野さんは「家族のような場所」といつている。そうした場がすべての人にとってほしい。

『いつかは A 事業所を離れることになるけど、自分の夢を叶えたい』

山崎 聡さん (仮名) 30 代 男性

【現在の生活について】

今は、家族の人と暮らしています。将来的には一人暮らしを目指しているので、今の時点で言うと、情報収集をしているかたちになっています。僕自身は、重度訪問介護やホームペルパーさんを利用したいです。生活を整えるには自分で考え、使える時間も確保していけたらいいと思います。そのためにはどんな制度があるか知っていく必要があります。その理由は、事業所によって時間帯が少ないところもあるからです。だから、勉強をしつつ、相談員さんに聞いて、一人暮らしに挑もうと思います。

今の状況では訪問入浴を利用しています。最初は相談員さんとのやり取りの中で、訪問入浴を頼めるか聞き始めました。自分で詳しく聞いて、事業所さんと契約してもらったんです。やっぱり来てもらったら助かると母親が言ってくれました。そのとき、訪問入浴をやってよかったと思いました。ショートステイ利用のことも考えています。いきなり一人暮らしを始めるということはちょっと不安な気持ちになるから、段階を踏みながらいきたいと思っています。

【現在の仕事や活動について】

現在の仕事や活動について、パソコン作業をしています。映像のお知らせ作りの手紙や弁当配達に使う外部食数、回収チェック表、厨房手当表、給食、業務日誌のデータ入力、名刺を打ち込んでいます。作業内容はたくさんあります。

最初はいろんな職員に Word、Excel のやり方を聞いて回っていき、地道に教わりながら覚えていくうちに、パソコン作業の楽しさを知りました。一人で何でもこなしています。一番やりがいある作業は名刺作りなんです。理由としては、職員や当事者の皆の名前や住所を、配置を慎重に動かしていくのが面白いんです。ほんの少しずれがあった場合は職員と一緒に確認してもらいます。細かい作業だから丁寧に作ることに意識をしています。だからこそ時間もかかってしまうんです。そのときに、始める前にいつもイメージをしてどこに置くか、頭の中で想像をすとうまくいくんです。このパソコン作業という仕事は学ぶほど知識がわいてくるから楽しいです。また、後輩にも教えてあげています。将来的には、就労支援 B 型介護つきにいかうと思うので、技術をもっと上げて、磨いていきます。

【学校生活について】

学校はどのような学校にいったのか、学校生活は楽しかったか、そうでもなかったのか、僕は校区の小学校にいきました。授業は国語が好きでした。漢字ドリルをたくさん書いて覚えてました。復習もやっていたので、それからは漢字がものすごく好きになり、この漢字の意味を家の中で調べたこともありました。あのときは没頭をしていたかもしれないです。

給食を食べて、午後からは常に先生に言われ、歩いたほうがいいよと優しく声をかけてくれたおかげで運動ができて、僕はウォーカーに乗って廊下の端っこまで行ったり、グラウンドの周りを歩きました。楽しい時間でした。雨のときはよくビデオを見せてくれました。あと、同級生が僕を、図書室まで連れてきてもらって本を読んでいました。その内容は歴史の本でした。友達は面白くてよい仲間でした。

小学校を卒業してからは支援学校に入学をしました。中学と高校は同じ学校で、学校生活ではパソコン授業でローマ字表を見て、キーボードで打ち込んで、全部覚えてうれしかったです。ソフトはパワー

ポイントで、アニメーション作りをしていて、マウスを使っていたけど、操作のやり方がわからなくて、どこにダブルクリックの使い方がわからない状況でしたが、先生が教えてくれたのでよかったです。体育の授業で10分マラソンがありました。ウォーカーに乗って走り、体育館の中を何回も走ったことが充実でした。

【実習について】

実習を2日間だけ行ったんです。最初はどんなところかわからない状況だったけど、職員さんが優しく声をかけてくれました。不安や緊張が出ていたと思います。そのときの作業内容は、袋詰めをして、何個入れたらいいかわからなくて、周りを見たら介護中だったから、雰囲気慌てていました。聞ける状態ではなかったから、違う職員さんによく聞けることができたんです。5個ずつ袋に詰めていきました。普通に面白くないと思っていました。たったの2日間の実習では足りないと感じたので、意味はあったのかと思いました。

【現在の通所先について】

高校を卒業してからはA事業所に入社しました。最初は今とは違う作業の場に決まりました。推測ですが、職員さんがここをすすめてくれたと思いました。僕は、あのときは右も左も全然状況がわからなくてかなり困っていて、どんな作業をしようか迷ってしまったんです。そのときに2人の先輩と出会いました。そして、その先輩の作業のやり方の説明を受けていく中で、こうやったらいいよと優しく話してくれたおかげで、少しずつ作業を覚えていきました。

気持ちとしてはもう自信がついたので、もっとほかの作業をやってみたいと思うようになりました。2年、前の場所で働いて、現在の場所に異動しました。バリアフリーでエレベーターもついていました。ちょうどいい機会に入ってよかったと思いました。車椅子だからほかの場所に行くのも遠いと感じていました。情報がまだまだ知らない状況でした。職員さんから言われて、「名刺を作ってみようか」と声をかけられたので、「はい、やります」と答えました。実際に名刺を作ることは初めての作業だからわくわく感が止まらなかったんです。作る工程がパソコンでやると思わなくて、どうするんだろうと思っていて、名刺用のソフトがあることを聞きました。新しい作業ができたときはうれしかったです。

【将来について】

目標は就労支援B型で、パソコンも使ってITの仕事をしたり、ホームページを作ったりしたいと思います。そのために今は情報だけ収集しています。今、31歳なんですけど、35歳で相談員と話して、就労支援B型介護つきにいきたいと思います。もう相談員には言ってあるんですが、35歳っていうことはまだ言ってないですね。これから少しずつ話していきたいと思います。今は、まだ内緒です。

旅行も好きなので、これから行ってみたいところ。。。アメリカとドイツです。アメリカは、本場のアメリカンフットボールがあって見に行きたいと思っていて、ドイツは観光目的です。まだ具体的には決まってないですが、、お城とか好きなので。国内なら山梨とか。歴史が好きなんです。戦国時代とか、そういう歴史が好きで、行ってみたいなって思っています。

今は、彼女はいません。特に好きな人もいません。将来、一人暮らしはしたいと思ってます。先の話ですが、東京に住みたいと思っています。東京には、大きな美術館があります。コロナで行けてなかったから、ぜひ美術館に行ってみたいんです。

今の仕事を辞めて、新しい仕事をしたり、一人暮らしをしたりするとすると、その時にはA事業所と

は離れることになるので、気持ちとしては少し寂しいと思っています。だけど、一人暮らししたりとか、IT系の仕事、頑張ろうかなって思っています。

解説

山崎さんの幼少期の経験は、よき友よき教師に囲まれた穏やかなものである。好きな漢字の練習に没頭し、身体障害もある彼は、教師の声かけに応じて歩行訓練を学校で行い、友人の手助けを借りて、図書館で本を読む。中学・高校は支援校でパソコンに出会い、操作を覚えていった。

課題があるとしたら、卒業に向けての実習であろう。たった2日間だった。やさしい職員がいたが、忙しく声をかけることができなかった。声のかけられそうな職員を見つけて声をかけ、何とか作業をしたが、様子をつかむ程度で、作業は面白いものではなかった。本人は楽観的で、2日しかなかったからこそ足りない、もっとやりたいと思わせる意図があったのではと考えているようだ。しかし、そうだろうか。高校卒業後、山崎さんは創思苑に就職した。他に実習を経験したという言葉はない。2日だけの実習で1カ所だけということだろうか。実習については、他のインタビューの中では2カ所行く例が多く聞かれた。就職に際しては、2カ所の選択肢からどちらかを選ぶという例が聞かれた。教員の勧めや母親の勧め等、他者の勧めによって決めたという例もあったが、山崎さんはどうだったのだろうか。客観的にみて、2日は明らかに実習として不足している。うがった見方かもしれないが、知的と身体とが重複している山崎さんに対し、様々な体験をさせても仕方ないと思っていたのではかと疑いたくなる。今回のインタビューに際して山崎さんはあらかじめ回答の原稿をつくり、音声読み上げソフトを使って読み上げてくれた。身体障害も併せ持つ彼は声で長くしゃべることが困難だからだ。そうした一見重い障害がある、実際に手帳や支援区分は重度に該当する山崎さんだが、支援機器を使うことで、しかも自らの身体的特徴を理解し、それを補うよう準備をするという彼は、果たして“重度障害”者なのだろうか。

職場での山崎さんの最初の配置について、職員の配慮があったと思われること、職場では先輩がやさしく丁寧に作業のやり方を説明してくれたことが語られた。ここでも実に穏やかに人間関係が築かれている。その中で作業をこなし、自分に自信がついたところで、次の職場を選んだ経験が語られた。創思苑では、毎年12月に利用者・職員共に自分の職場希望を提出する機会があるという。山崎さんもこれを利用して、次の職場の希望を提出したようだ。

新しい職場はバリアフリーで、車いすの山崎さんにとってはアクセスのよい場所での仕事となった。そして名刺づくりという新しい仕事に出会った。この仕事の提示は職員からであり、本人が希望したわけではない。しかし、山崎さんは未知なる新しい挑戦にワクワクしたという。

先述の、最初の職場の決定における職員の配慮も含めて、山崎さんの例から学ぶ意思決定における重要なポイントの一つは、選択肢の数や事前の説明ではなく、相手がやりたいと思えるようなことを提示することであり、そのためには相手を徹底的によく知ること、どうしたら本人が喜ぶか、満足を得られるかを考えることではないだろうか。

山崎さんは家族と暮らしながら、4年後、35歳での自立生活の実現に向けて情報収集をしている。得意のパソコンを使って自力で、または相談員の支援も得ながら、次の生活を実現しようとしている。すでに訪問入浴を使ってサービスの利用を体験し、家族の同意も得つつある。恋愛よりも、今は一人暮らしの実現が先のようなのだ。

将来はITの仕事、ホームページ制作などを手掛けたいと考えている。夢に向かって着実に前に進もうとしている。

『わいらだってちゃんと生きてるんやから、いなくなればいいなんていわんでほしい 』

東山 進さん（仮名）50代 男性

【家族のこと】

生まれた家族は、第3人の5人家族でしたが、1人の弟が小学校の時に亡くなった。一緒に住んでるときは、仲が悪くて大喧嘩、かなりしてた。今は仲良く、たまにLINEでおやすみとか。正月に帰るんで、必ず。正月に帰って、いろいろ話をしたりする。グループホームで暮らすことも、結構いいにはちょっと離れて欲しいというか。長男やからどうのこうのいわれんでよかったから、出てよかった。喧嘩したら、長男やから我慢せえみたいなのを言われてきたから。

【現在の生活について】

39歳からグループホームに住んでいます。自分を含めて6人います。みんな仲が良いです。ひとり、たばこを吸っている人がいて、ちょっと苦手です。たばこのにおいも苦手で、あまりお話できていません。仲のよい人とは、好きなDVDの話をしたり、お互いに貸し合ったりしています。休みの日は、ほとんど二度寝、三度寝したり、あとスマートフォンでゲームをしたりしています。LINEも使っていて、A事業所の元職員の人と連絡を取ることがあります。

グループホームの5階に住んでいるので、お出かけは結構階段を下りたり、自転車に乗ったりするので、だいぶ運動になります。自転車に乗ってブックオフに出かけて、漫画やDVDを買ったりとか。ガイドヘルパーさんと出かけることも結構あります。公園に行って、花を見てきたりしました。ガイドヘルパーは月1回で、どこに行くかは自分が決めています。ただ、小旅行はあんまり行ったことがないから、支援を担当している職員に相談したりする。

【A事業所の仕事について】

最初はパンの仕事で家から通ってたから、結構遠かったりした。それからちょっと遠いからということで聞いたら、職員にA事業所をすすめられて。それからA事業所に通うことになった。

これまで3年くらいやってきたA事業所の映像への出演はあと2、3年やりたい。結構緊張するときは、YouTubeの音楽系の動画を見て調子を整えているので、結構キャスターが楽しい。最初、カメラに映ることが極端に嫌だった。だけど、津久井やまゆり園の事件で、わいも知的障がい者のことをしゃべりたいと思ったこととA事業所の職員からキャスターをやってみることをすすめられたので、映ることを決意した。緊張すると早口になったりするから、調子を整えて、深呼吸したりしています。早口になっていることは、プロデューサーをしているA事業所の仲間が「ちょっと、早口だよ」と教えてくれます。どもりのところもあるから、言いたいんだけど、言葉が出なくて。やっぱり、昔は嫌やったけど、今はカメラに映ることが結構楽しい。

他には、弁当の盛り付けをやっています。結構、自分で料理したりするのも好きやから。最初、自分でその仕事をやりたいって言った。他にも軽作業とかをやっています。A事業所の会議の司会もやっていて、大変は大変なんやけど、結構自分でも話したりするの苦手やから、しゃべるのがちょっと得意になりたいなって感じて。

【交際について】

今、A事業所を利用している女性の彼女がいます。お付き合いして2年くらい。毎日、会っています。それぞれ別のグループホームに住んでいます。これまでデートはあんまりしてこなかったけど、北海道に行ったときにちょっとデートっぽいことできた。お付き合いするきっかけは、自分から付き合っと言って、承諾くれたこと。それからA事業所のみんなにちょっと告白じゃないけど、「お付き合いします」とみんなに報告した。お付き合いしてますよっていうことをみんなに知ってもらいたかったから。彼女とみんなに言おうねと決めました。彼女とは特に気が合うなと思う。

将来は結婚したい。彼女とはまだ話せていないけど、子どもも欲しい。子どもが大好きやから。もし結婚したら、グループホームで住みたいかな、やっぱり。グループホームじゃないと、結構1人でなんやかんやって大変やし、彼女も多分2人やったら、ちょっと大変やと思うから。彼女と相談して、できれば早くに結婚したいな。

【A事業所に来る前のこと】

A事業所に来る前はひきこもり、14年間やってた。その前にダンボールの会社に勤めとって。その会社に9年働いた。会社はおふくろが探してきてくれた。

最初の仕事は、中学校の養護学級の先生が探してくれて、鉄工所で釘にプラスやマイナスを入れていく仕事で、箱に釘が余計にあって、それをスコップですくって、ほいで機械に入れてするやつやった。それで6か月おったけど、結構、油仕事とかものすごく、新しい服とかももらったんやけど、もう1日でズタボロになるくらいの油。身体もたんし、続けられなかった。

14年間ひきこもりして、それでうちのおやじの知り合いというか、友達のおばさんから、「ぶらぶらしてんのやったら、A事業所で働いた方がええんちゃう？」って言われて。ほいで紹介してもらって。最初はぶらぶらしてるのもあれやし、そろそろ働いたほうがいいかなと思いつつ行ってみた。

【いじめとドラマ】

ほんまは高校も行きなかつたんやけど、いじめが怖くて、ちょっと行けなかった。中学校の時にいじめがあった。養護学級に行ってたんですけど、養護学級でしゃべったり、ゲームの話したり。人と会話するのがものすごく好きやから、グループホームでも職員と話したりするのがものすごく楽しみで。

小学校のときは応援部に入りたかったりしたけど、養護の風邪がうつるから入ってくるなとか言われたり。わい、三々七拍子ができる。だから、応援がものすごく好きやったから。でもできなかったから、悔しかった。ほいで、A事業所が制作したドラマで応援のやつやったから。ぼくたちわたしたちはっていうやつで、タイムスリップして過去に戻って、高校3年生、17歳に戻って。ほいで結構、男兄弟やから、女のきょうだい欲しかった願望あったから、ドラマの中で利用者がお姉さん役、妹役で登場してくれたり。ドラマで実現できてうれしかった。

【グループホームのこと】

グループホームというところがあるって職員から聞いて。見学に行って、2日間だけ練習でこういう感じて泊まった。結構いろいろと自由があるから、結構あれしたらあかん、これしたらあかんがな

かったから、自分なりに楽しみだった。それまでに精神科の病院に入院で、無理矢理入れられたから。ほいで、鍵とかもかけられたから。ほいで、部屋の中でトイレやって。それでグループホームを体験してみたら、楽しかった。ここだったら生活してもいいかなって。

【ピープルファーストのこと】

ピープルファーストの実行委員会には入っていないけど、会議には行ったりする。ピープルファーストも最初知らんかって、ドラマで「闇の王」ってあって。それでやったから。

【ネパール旅行】

ネパールへは自分が行きたいと言った。結構楽しかった。飛行機から山が見えたから、それが楽しくて。あとみんなと行ったから。これからも海外旅行はぜひ行きたい。

【津久井やまゆり園事件に思うこと】

津久井やまゆり園で19人も殺されて、知的障がい者なんかいなくなればいいって言われたけど、わいらだってちゃんと生きてるんやから、ああいうことを言われる筋合いはないと思います。

解説

東山さんは、家族の中で、長男としてこうあらねばならないという期待、役割を背負って、同時におそらくそれに抗って生きてきたのだろう。今はグループホームにいて、家族との距離感ができて、いい感じで仲良く過ごしているようだが。

彼は、本当はしゃべることが好きだったが、いじめの経験で自らを閉じ込めてしまったのだろう。話すことが苦手とも言っている。いじめが原因で高校にも行けなかった。

仕事を始めてからは長いひきこもりの経験があると語っている。その間に精神科病院への強制入院も経験しているようだ。しかし、同時に9年勤続という仕事の経験にも言及している。環境さえ整えば、やれる人なのだ。

その環境をA事業所で得ることができた。今までやれなかったこと、本当はやれるしやりたかったことを一つ一つ叶えている。ドラマの中で応援団を演じ、話すことを生業としたキャスターの仕事や会議の司会を引き受ける。仲間と活動し、彼女もいて、毎日会って、将来は結婚したいし、子どもも欲しいと希望が膨らむ。

彼はA事業所に来ることができて、生き直しができて、今、その渦中にいるけれど、津久井やまゆり園の事件で死んでしまった人たちにはもうその機会はない。彼は津久井やまゆり園での出来事を自分ごととしてとらえ、社会への憤りを忘れない。キャスターの仕事はそうした社会的な意義も持っている。